

Title	日本思想史 上代國民の精神生活(清原貞雄著, 中文館發行)
Sub Title	
Author	淺子, 勝二郎(Asako, Shojiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1929
Jtitle	史学 Vol.8, No.4 (1929. 12) ,p.158(666)- 159(667)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19291200-0159

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

二篇あつて、その中の十九篇は書名のみ知られてゐて實物の存否不明のものであるといふ。

百餘年を溯つた當時に於いて、都を離れた僻遠の地の未知の山川や地方民に對する厚意に満ちた觀察の記録が、その地方に住する現代の人士にとつて深い感興であるのは當然である。「伊那の中路」「來目路の橋」「わがこゝろ」は、何れも遊覽記中の信濃に關する記録であつて、東北研究に造詣深い柳田先生によつて校訂せられ、活版本として世に出されるに至つたことは、少くとも信濃に郷里を有する者の感謝であり、又弘く歴史に興味を寄する者の喜悅でなければならぬ。

白井秀雄翁が何れの目的を以て旅に志したか、家出をしなければならぬ理由が奈邊に存したかは、その家の歴史と共に不明であるが、兎に角「北邊の雪の底に隠れて、四十餘年の孤寂生涯を味却すべく運命づけられたる天才であつたことは、「わがこゝろ」の附録なる柳田先生の「遊歴文人のこと」の一文に詳説されてゐる。又「彼の文章は巧みに古文の骨法を把へてはゐるが、一派の學匠に就て陶冶せられた痕が無いのみならず、往々にして曲亭一流の讀み本の感化を認めるのは、恐らくは刻苦自修の人であつたこととを語るものであらう」とも考證せられてゐる。和歌の鑑賞に盲なる筆者は、その巧拙を論ずる資格はないが、感興の湧くがまゝに詠み込まれた無數の和歌は、翁が此の道の達者であつたことを物語り、又その交遊の士の中にも和歌の心得のある者が多かつたやうである。

天明の初から文政の末といへば、江戸の繁榮はその頂點に達し

た時代であつて、藝才ある者は多く都會に集り、國を憂ふる輩は漸く尊王を説いた時代である。然るに眞澄翁の如き篤學の士が遂に都に向つて情を寄せず、風物の枯れて徒らに寂しい北國に歴遊を續けたのは解し兼ねる不可思議である。然し此の不可思議の中に眞澄翁その人を窺ふべきである。彼が後世に對する何等の計畫もなく、旅にあつて書き誌した此の旅の記録が、知識の價値の極度に低下した昭和の今日、期せずして心ある人の感激を以て報いられやうとは、翁の夢にも想像しなかつたところであらう。(有賀春雄)

日本思想史 上代國民の精神生活 (清原貞雄著 中文館發行)

本書は著者が曩に公にせられた「日本國民思想史」を基礎として上代固有思想の時代に就て論評を試みられたものであつて、引續いて世に現はれんとするもの、第一編である。

著者は先づその序に於て近頃やかましい思想問題を解剖し、國民の思想の悪化は自國文化に對する無理解に基くものと脱まれ、たゞに研究の興味といふ個人的の問題からばかりでなく、國民の思想問題といふ社會的、實際的問題からいつても自國文化特に大陸文化の影響を受けぬ以前固有文化を闡明するといふ事の必要である事を力説せられ、次にその研究の方針及び目的として純粹固有文化の時代即ち大陸文化特に儒教を輸入する以前に於ける我國國民の生活に就ては徳川時代に二種の見解——儒學者のそれと復古國學者のそれと——があるが、何れも極端に走り過ぎて正

しくないから、此書に於ては出来得る限り、冷静に公平に観察して上代國民の精神生活を口實に再現して見たいといふ事を述べて居られる。

實際、第一章信仰生活より第五章建國の理想に到る迄、著者の立場は飽く迄公平、所説は一々穩當であつて序にいはれた目的は見事に實現せられたと思ふ。

が然し、往々不明瞭な個所も無いではなかつた。例へば一方、上代とは固有思想の時代であるといはれながら他方、上代國民の精神生活の研究に於ても、主として我日本の建國以後我大和民族が國民生活、國家生活を營むやうになつてから以後の精神的の方面を問題とするといはれた如き。

歴史其ものは、何所までも社會生活又は國民生活の理法を研究する事を本領とすべきものであるとし、民族の研究は民俗學者、人類學者考古學者の研究範圍であつて歴史家の研究範圍ではないといはれた如き。

これらの事柄は、或は思想史の全體系に對しては重大なる關係を有しないかも知れないが、然し最も重大なる問題が著者に依て全く看過されて居る。

著者は思想史に就ての明確なる概念を與へられなかつた。

全體として、微温的に印象づけられたのは、そのために外ならぬ。

斯くいへばとて、本書の價值の問題とは、何等關するところはない。

著者は元より斯界の權威者、筆者は唯これ一介の貧書生、淺薄

なる一讀書子。

淺薄なる讀書子の注意を惹いた事がたま／＼この高著を真書するものてなければならぬ。

大方に推薦する次第である。(淺子勝二郎)